

ヒブワクチン 予防接種

ヒブワクチンは乳幼児の細菌性髄膜炎を予防します。幼い子どもたちの命を守る大切なワクチンです。

日本では平成20年12月から使用されているワクチンです。これまでは公費負担による任意接種でしたが、25年度からは法定接種になりました。

生後2か月になったら早めに接種を受けるようにして下さい。



世界の
子どもに
ワクチンを

日本委員会

予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

- 受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知ってほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。
- 健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。
- 前日は入浴して、体を清潔に。
- 予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。
- 母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）
- 接種の会場で、体温を測り、記入します。
- 予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ていてください。
- 接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



「ヒブワクチン」は乳幼児の髄膜炎（ずいまくえん）を予防するワクチンです。

髄膜炎とは、脳や脊髄(せきずい)という重要な神経を包んでいる髄膜に細菌やウイルスが感染しておきる病気。発熱、嘔吐、頭痛、不機嫌、けいれんなどの初期症状から始まり、ときに重篤になることもありますし、重い後遺症も心配です。もしかかかると治療がとても難しい感染症です。

細菌性髄膜炎の中で半数以上占めているのが「ヒブ (Hib)」(※)です。日本では年間に 600 人以上の乳幼児がかかっていると推測されています。そのうちで約 5% (年間約 30 人) が死亡、約 25% (年間約 150 人) が発育障害、聴力障害、てんかんなどの重い後遺症を残しています。

副作用は接種部位が腫れやすいということが主で、重い障害はほとんどないとされています。

接種時期は乳幼児に行っている四種混合ワクチン (DPT-IPV) との同時接種が適しています。さらに同じ細菌性髄膜炎をおこす肺炎球菌に対するワクチン (プレベナー) とともに接種することで、予防効果がより高まります。

子どもたちを重い髄膜炎から守ってくれることが期待できるワクチンです。

※「ヒブ (Hib)」は「b 型インフルエンザ菌 (Haemophilus influenza type b)」の略。“インフルエンザ”という名前が使われていますが、冬に流行する「インフルエンザ・ウイルス」とは全く別の病原体です。

ヒブの予防接種 (アクトヒブ)

【法定接種】生後 2 か月～5 歳未満

＜標準＞生後 2 か月～7 か月未満で接種を開始・・・合計 4 回

初回は 4～8 週の間隔で 3 回

(3 回目は 12 か月未満までに完了する)

(医師が必要と認める場合は 3 週間の間隔も可)

追加は初回完了後 7～13 か月の間に 1 回

＜標準的に接種できなかった方＞

○接種開始が 7 か月以上 12 か月未満・・・合計 3 回

初回は 4～8 週の間隔で 2 回

(2 回目は 12 か月未満までに完了する)

(医師が必要と認める場合は 3 週間の間隔も可)

追加は初回完了後 7～13 か月の間に 1 回

○接種開始が 1 歳以上 5 歳未満・・・1 回の接種

予防接種を受けたあとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります(アナフィラキシー・ショック)。万一のために 15 分程度は医院の中にいていただき、そのあともしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしててください。(その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。)

ヒブワクチンは、不活化してあるワクチンです。

ほかの予防接種は、1 週間以上(※)たってから受けてください。

※接種の翌日から次の接種日の前日まで 6 日以上

ヒブワクチン

- ①注射したところは、適度にもんでください。
- ②今日は激しい運動は避け、普通の生活をしてください(入浴はかまいません)。
- ③接種したあと、まれに丸 1 日以内に熱をだすことがときがありますが、ほとんどはそのままでおさまります。
- ④注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのままでも数日でおさまります。